日本医史学雑誌　第68巻第1号（2022）　65–71

アヴィセンナ Avicenna『医学典範 Liber canonis』

坂井　建雄

順天堂大学保健医療学部

アヴィセンナ Avicenna（イブン・スィーナー Ibn Sina; 980–1037）は，アラビアの医学者・哲学者で，イスラム世界で「学問の頭領」と呼ばれ尊敬された.『医学典範』は，ギリシャ・ローマの医学に基づいて医学の理論と実地を集大成した著作で，ヨーロッパではラテン語に訳されて医学の教科書として広く用いられ，ユーナニ医学では現在でも聖典として尊重されている.

アヴィセンナの『医学典範』

アヴィセンナの『医学典範 Liber canonis』は5巻からなり，ギリシャ・ローマの医学，とくにガレノスの医学を集大成し再編成をした総合医学書である．ガレノスの医学書はフナイン・ブン・イスハーク（ラテン名：ヨハニティウス；809–873）らによってアラビア語に翻訳されていて，アヴィセンナはそれを利用することができた.『医学典範』は12世紀にクレモナのゲラルドゥス（1114–87）によりラテン語に訳されてヨーロッパに広まった．その内容は英語訳（1999–2014）[1] で読むことができる．日本語訳としては，第1巻第1部のアラビア語原典からの訳（1981）[2] と，第1巻全体の英語訳からの重訳（2010）[3] がある.

第1巻は医学の総論で，4つの部からなる．第1部は医学の総論と自然学を扱い，6論からなる．第1論では医学の定義と主題を扱い，医学が理論と実地に分かれること，アリストテレス哲学に基づいて病気に4つの原因（質料因，起動因，形相因，目的因）があることを述べる．第2論ではガレノスの自然学・生理学に基づいて，4つの元素（土，水，空気，火）について，第3論では基本的な気質（熱，冷，湿，乾）とその混合，諸器官の気質，年齢と性別による気質について，第4論では体液の区分とその生成の仕組みについて述べる．第5論では人体の器官（骨，筋，神経，動脈，静脈）を扱う．第6論は身体の能力に3種類（自然的，生命的，神経的）を区別する．第2部は病気の原因と診断を，第3部は健康を保持する方法を，第4部は治療法を扱う.

第1巻　医科学の一般的な事物
第1部　医学の定義と主題，自然の事物
　第1論　医学の定義と主題
　第2論　元素
　第3論　混合
　第4論　体液
　第5論　器官（1. 骨，2. 筋，3. 神経，4. 動脈，5. 静脈）
　第6論　身体の能力（自然的，生命的，神経的）
第2部　疾患の分類，原因と症状
　第1論　疾患
　第2論　疾患の原因
　第3論　徴候と症状（総論，脈，尿）
第3部　健康の保持と養生法（小児期，成人期，高齢期，病弱期，気候変化）
第4部　治療法の分類（疾患，不調，浄化，腫脹，切開，鎮痛）

第2巻では，医薬についての総論に続いて，約800種の単純医薬を，語音順に扱う.

第2巻　単純医薬
序論
第1論　医学において必要な処置と医薬の価値の

知識について一般的典範
第1章　個別の医薬の混合
第2章　実験により個別の医薬の混合を知る
第3章　理性により個別の医薬の混合を知る
第4章　個別の医薬の能力の作用を知る
第5章　医薬に外部から加わることの規則
第6章　医薬の収集と保管
第2論　個別の医薬の力の認識
個別の医薬の列挙
（語音順）

第3巻は局所性の疾患についての各論で，22部からなる．身体の各器官を冒す局所的な疾患を扱い，頭から足への順に配列されている．

第3巻　疾患の各論，人体の器官を冒す疾患，頭から足へ，現れたものと隠れたもの
第1部　頭部の病気一般
第2部　神経の病気
第3部　眼の病態
第4部　耳の病態
第5部　鼻の病態
第6部　舌と口の病態
第7部　歯の病態
第8部　歯肉の病態
第9部　咽喉の病態
第10部　肺と胸部の病態
第11部　心臓の病態
第12部　乳房とその病態
第13部　食道と胃と周囲の病態
第14部　肝臓とその病態
第15部　胆嚢，脾臓，それらの病態
第16部　腸の病態
第17部　肛門の病気
第18部　腎臓の病態
第19部　膀胱の病態と尿
第20部　男性生殖器の病態
第21部　女性生殖器の病態
第22部　体肢の器官の病態

第4巻は部位を特定できない疾患についての各論で，熱病とその経過，腫脹，外傷，中毒，外貌を扱う．

第4巻　全身の病気
第1部　熱病
第1論　一過性熱
第2論　腐敗による熱について総論
第3論　消耗熱
第2部　予後と分離の規則
第1論　分利とそれを見分ける手段，よい分利と悪い分利，その区分と規則
第2論　分利の日と時間
第3部　腫脹と膿疱
第1論　その熱いものと腐敗するもの
第2論　冷たい膿瘍とそれに伴うもの
第3論　癩
第4部　連続性の破断，骨折と副木に関わるもの以外に
第1論　体肢の外傷
第2論　擦過，摩擦，打撲，捻挫，転倒，衝突，破裂，出血など
第3論　潰瘍
第4論　神経の連続性の破断，骨の連続性の破断の回復に関係しないもの
第5部　整復
第1論　脱臼と整復
第2論　骨折一般の基礎
第3論　各部位の骨折
第6部　毒
第1論　経口毒の配置について知られることの基礎，動物由来でない毒の治療について詳論
第2論　動物由来の経口毒
第3論　咬傷の処置一般．毒虫よけ．蛇咬傷の治療と各種
第4論　人と動物による咬傷
第5論　毒虫による刺傷と咬傷
第7部　容貌
第1論　毛髪の病態と雲脂

第 2 論　皮膚の色の病態
第 3 論　皮膚を傷めるもの，色以外で
第 4 論　身体と体肢に関する状態

第 5 巻は複合治療薬を扱い，総論に続いてさまざまな形状の複合薬を 12 種に分けて扱う．

第 5 巻　複合薬の処方，解毒薬
序論　複合医薬の必要性
第 1 部　重要な複合薬
第 1 論　解毒薬，重要な練り薬
第 2 論　緩下薬
第 3 論　緩下性と非緩下性の練り薬
第 4 論　小児用の粉薬，口用粉薬，口中滴下薬
第 5 論　嘗薬
第 6 論　飲料，濃縮液
第 7 論　ジャムと蜂蜜
第 8 論　錠剤
第 9 論　煎じ薬と丸薬
第 10 論　油薬
第 11 論　軟膏と膏薬
第 12 論　各部位に適した軟膏，粉剤などの複合薬
第 2 部　薬局方
（頭から足へ各部位）

『医学典範』の翻訳と出版

アラビアの医学書は 11 世紀以後にヨーロッパに紹介された．南イタリアではモンテ・カッシーノ修道院のコンスタンティヌス・アフリカヌス（?–1098/99）が中心となって，スペインではレコンキスタ後のトレド（1085～）で，アラビアの医学書がラテン語に盛んに翻訳された．『医学典範』はクレモナ出身のゲラルドゥス（1114–1187）が翻訳して手稿として広まった．ヨーロッパ各地，とくにイタリアの大学で医学の教科書として広く用いられた[4]．

15 世紀終盤から，『医学典範』は印刷・出版されるようになった．一部が抜粋された形で，注釈がついた形で，医学教材集の『アルティチェラ』の一部としても出版されたが，全 5 巻がまとまった形での出版は，1473 年のシュトラスブール版から 1608 年まで 24 版を確認できる．

出版年	出版地	出版社	判型	冊数
1473	Strasbourg	Adolf Rusch	fol	5
1473	Milan	P. de Lavagnia	fol	3（in 2）
1476	Padua	Johannes Herbort	fol	1
1479	Padua	Johannes Herbort	fol	1
1482–83	Venice	Petrus Maufer, Nicolaus de Contugo et Socii	fol	1
1486	Venice	Petrus Maufer et Socii	4to	1
1489–90	Venice	Dionysius Bertochus	fol	2
1490	Venice	Octavianus Scotus	fol	1
1495	Venice	Baptista de Tortis	fol	1
1500	Venice	Simonem Papiensem	4to	1
1505	Venice	Octaviani Scoti	4to	1
1507	Venice	Paganinus de Paganinis	4to	1
1510–12	Pavia	Jacob de Burgofranco	fol	1
1520–22	Venice	Octaviani Scoti	fol	4
1522	Lyon	Jacobi Myt	4to	1
1527	Venice	Luce Antonii Junta	fol	1
1544	Venice	Juntas	fol	1
1555	Venice	Juntas	fol	1
1556	Basel	Joannes Hervagios	fol	1
1562	Venice	Juntas	fol	1
1564	Venice	Vincentium Valgrisium	fol	2
1582	Venice	Juntas	fol	1
1595	Venice	Juntas	fol	2（+1）
1608	Venice	Juntas	fol	2（+1）

私の所蔵本はラテン語訳『医学典範』で，ヴェネツィアのジウンタから1544年に出版された[5]．茶色の牛革で装丁されたフォリオ判（高さ34 cm）の大型本である．第1巻が88葉，第2巻が87葉（冒頭3葉半に索引），第3巻が241葉（冒頭6葉に索引，末尾半葉に眼の解剖の説明図），第4巻が117葉（冒頭4葉に索引），第5巻が28葉半で，さらに「心臓の力」が18葉，「医学の歌」が12葉ある．巻末には付録として，アラビア語の用語解説が16葉，背骨の脱臼治療の説明図が1葉，古いアラビア語名の説明が5葉，アヴィセンナの伝記が2葉半つけられている．

アヴィセンナの生涯

アヴィセンナの生涯については，職歴などを記した自伝と，それを補う弟子による記録から知られる．ブハラ（現在のウズベキスタン）近郊でサーマーン朝のペルシャ人官吏の子として生まれ，幼い頃からイスラム，ギリシャ，インドの学問，とくに哲学，医学，数学，天文学などを深く学んだ．16歳の時にスルタンの病気を治療して，宮殿内の図書室への出入りを許され豊富な図書から多くを学んだ．しかしサーマーン朝が滅亡し父親も亡くなって以降，各地の宮廷で医師または宰相として仕えながら政治的な浮沈が激しく，しばしば身の危険にさらされる放浪の生活を送った．各地を転々とする中で哲学と医学の著作を数多く著し，最後はハマダーンで没した[6,7]．

アヴィセンナの影響と名声

ギリシャ・ローマの医学は，哲学者たちによる自然の事物についての理論的考察や，ヒポクラテ

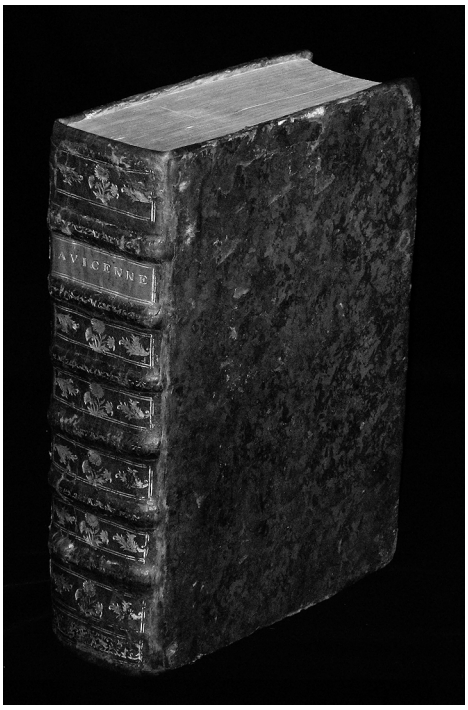


図1 アヴィセンナ『医学典範』ラテン語訳（1544）．坂井建雄蔵．

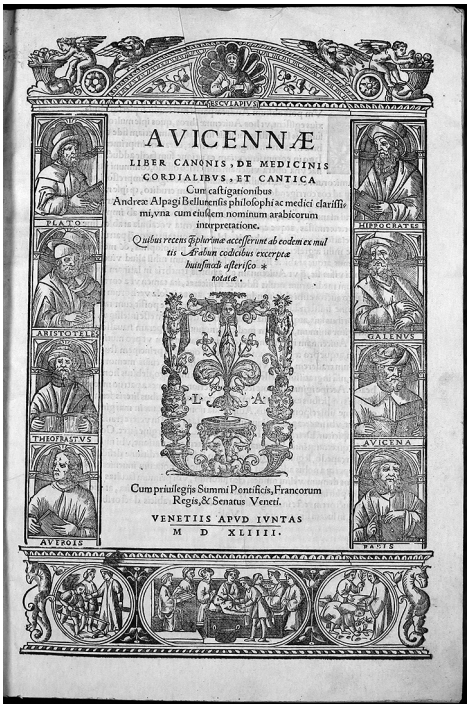
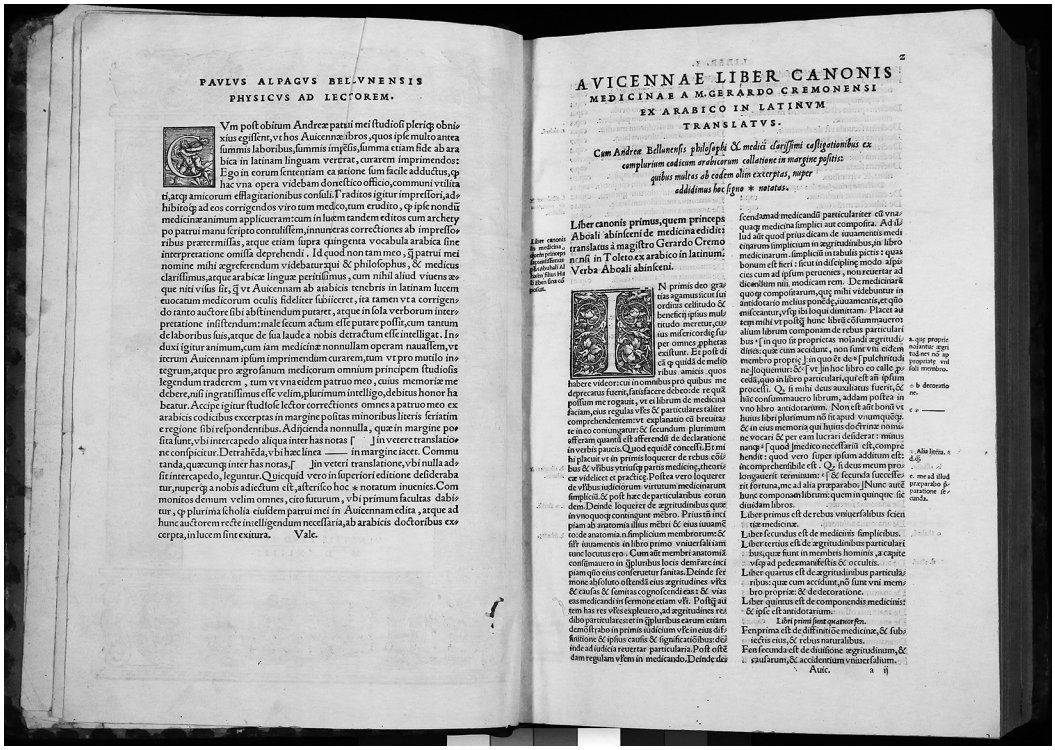


図2 アヴィセンナ『医学典範』ラテン語訳（1544），扉．坂井建雄蔵．



PAVLVS ALPAGVS BELLVNENSIS PHYSICVS AD LECTOREM.

Vm post obitum Andreæ patui mei studiosi plerique obnixus egissent, vt hos Auicennæ libros, quos ipse multo antea summis laboribus, summis impensis, summa etiam fide ab arabica in latinam linguam vertrat, curarem imprimendos: Ego in eorum sententiam ea ratione fum facile adductus, cp hac vna opera videbam donesticio officio, communi vtilitati, atcp amicorum effagitationibus consulu. Traditos igitur impressori, adhibitoqp ad eos corrigendos viro tum medico, tum erudito, cp ipse nondu medicinæ animum applicueram: cum in lucem tandem editos cum archetypo patrui manu scripto conuulssem, innumeras correctiones ab impressoribus prætermissas, atque etiam supra quingenta vocabula arabica sine interpretatione omissa deprehendi. Id quod non tam meo, q̃ patrui mei nomine mihi ægre ferendum videbatur, qui & philosophus, & medicus clarissimus, atque arabicæ linguæ peritissimus, cum nihil aliud vtueres æque niti visus sit, q̃ vt Auicennam ab arabicis tenebris in latinam lucem euocatum medicorum oculis fideliter subiicerer, ita tamen vt a corrigendo tanto auctore sibi abstinendum putarer, atque in sola verborum interpretatione insistendum: male secum actum esse putare possit, cum tantum de laboribus suis, atque de sua laude a nobis detractum esse intelligat. Induxi igitur animum, cum iam medicinæ nonnullam operam nauassem, vt iterum Auicennam ipsum imprimendum curarem, tum vt pro mutilo integrum, atque pro ægrosanum medicorum omnium principem studiosis legendum traderem, tum vt vna eidem patruo meo, cuius memoriæ me debere, nisi ingratissimus esse velim, plurimum intelligo, debitus honor habeatur. Accipe igitur studiose lector correctiones omnes a patruo meo ex arabicis codicibus excerptas in margine positas minoribus literis seriatim e regione sibi respondentibus. Adijcienda nonnulla, quæ in margine posita sunt, vbi intercapedo aliqua inter has notas ⌈ ⌋in vetere translatione conspicitur. Detrahēda, vbi hæc linea —— in margine iacet. Commutanda, quæcunq; inter has notas, ⌈ ⌋in veteri translatione, vbi nulla adsit intercapedo, leguntur. Quicquid vero in superiori editione desideraba tur, superq; a nobis adiectum est, asterisco hoc * notatum inuenies. Commonitos denum velim omnes, cito futurum, vbi primum facultas dabitur, cp plurima scholia eiusdem patrui mei in Auicennam edita, atque ad hunc auctorem recte intelligendum necessaria, ab arabicis doctoribus excerpta, in lucem sint exitura. Vale.

AVICENNAE LIBER CANONIS MEDICINAE A M. GERARDO CREMONENSI EX ARABICO IN LATINVM TRANSLATVS.

Cum Andreæ Bellunensis philosophi & medici clarissimi castigationibus ex complurium codicum arabicorum collatione in margine positis: quibus multos ab eodem olim excerptas, nuper addidimus hoc signo * notatas.

Liber canonis primus, quem princeps Aboali abinsenni de medicina edidit: translatus à magistro Gerardo Cremonensi in Toleto ex arabico in latinum. Verba Aboali abinsenni.

Liber canonis primus, quem princeps Aboali abinsenni de medicina edidit: translatus à magistro Gerardo Cremonensi in Toleto ex arabico in latinum. Verba Aboali abinsenni.

Liber canonis primus, quem princeps Aboali abinsenni de medicina edidit: translatus à magistro Gerardo Cremonensi in Toleto ex arabico in latinum. Verba Aboali abinsenni.

図3 アヴィセンナ『医学典範』ラテン語訳（1544），序文と第1頁．坂井建雄蔵．

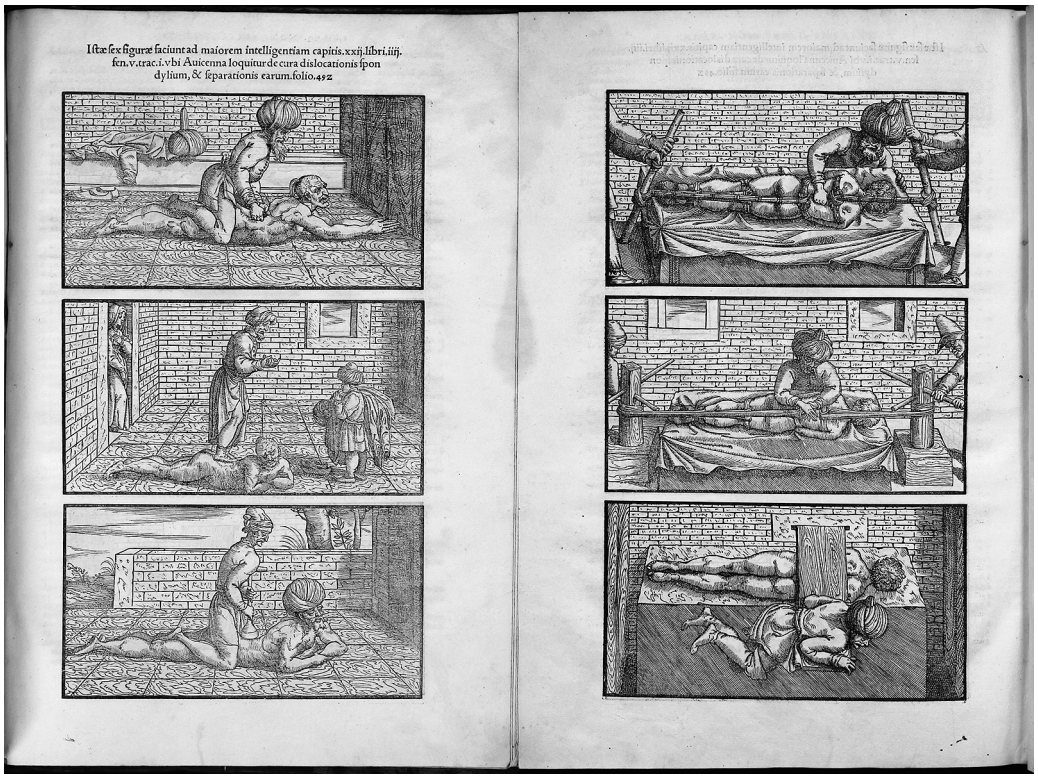


図4　アヴィセンナ『医学典範』ラテン語訳（1544），巻末の背骨の脱臼治療の説明図（第4巻，第5部）．坂井建雄蔵．

スなど医師たちによる臨床観察から始まり，対立する学派間の論争を経て発展してきた．ガレノスはそれまでの医学文書を収集し解剖学の知見を加えて，洗練された医学理論を作り上げ，多岐にわたる膨大な医学著作を書き残した．アヴィセンナの『医学典範』はガレノスの医学著作を集大成した総合的医学書で，ガレノスの医学理論が初めて体系的な形に整理されたものである．

『医学典範』はガレノスの医学の基本として広く用いられた．12世紀ないし13世紀にスペインのトレドでゲラルドゥスによりラテン語訳され，13世紀末から北イタリアの大学で教材としてよく用いられた．ラテン語訳は1473年以後1608年までの間にパドヴァ，ヴェネツィア，リヨンなどで少なくとも24版が出版されてヨーロッパ各地に広まった．16世紀中葉からは，フェルネルの『医学』（1554）を始めとして新たな医学理論書や，また医学実地書が書かれて医学教育に使われるようになったが，『医学典範』は17世紀まで医学の教材として使われ続けた．

ギリシャ医学を受け入れて発展したアラビア医学は，現在でもユーナニ医学と呼ばれてパキスタンやインドで広く行われている．ユーナニ医学は，中国医学，インド伝統医学（アーユルヴェーダ）とともに世界三大伝統医学の一つとされる．ユーナニという語は，「ギリシャの（Yunani）」を意味するアラビア語ないしペルシャ語から由来する．パキスタンとインドでは，政府がユーナニ医学を正式に承認している．ユーナニ医学校ではイブン・スィーナーの『医学典範』などを医学教育が行われ，学術資格をもった治療者を育てている．また家庭の中で伝統的なユーナニ医学の修業を積んで治療を行う者もいる[8,9]．

謝辞　矢口直英氏（東京大学大学院人文社会系研究科）から，『医学典範』の内容と訳語に関して有益なコメントをいただいたことに感謝したい．

文献

1）Bakhtiar L.: The canon of medicine. In 5 vols. Chicago: KAZI Publications; 1999–2014.
2）五十嵐一（訳）．イブン・スィーナー　医学典範．朝日出版社；1981.
3）檜學，新家博，檜晶（訳）．アヴィケンナ『医学典範』日本語訳．第三書館；2010.
4）Siraisi N. Avicenna in Renaissance Italy: the Canon and medical teaching in Italian universities after 1500. Princeton NJ: Princeton University Press; 1987.
5）Avicenna. Liber Canonis, De medicinis cordialibus, et Cantica cum castigationibus Andreae Alpagi Bellunensis ... una cum ejusdem nominum Arabicorum interpretatione. Venetiis: Apud Juntas; 1544.
6）Afnan SM. Avicenna: his life and works. London: Allen & Unwin; 1958.
7）McGinnis J. Avicenna. Oxford: Oxford University Press; 2010.
8）バンナーマン R，バートン J，陳文傑（責任編集），津谷喜一郎（訳）．世界伝統医学大全．平凡社；1995.
9）サイード・パリッシュ・サーバッジュー編訳．ユーナニ医学入門：イブン・シーナーの『医学規範』への誘い．ベースボール・マガジン社；1997.